

十月の保育

生活訓練

倉橋惣三

久しぶりで會ふ幼児達。なつかしさに變りはないが、暫く會はない中にいろ／＼の變り方をしてゐる。見違へるようになり、^{たくま}遅し、色も黒く、一寸幼児はなれしたのもある。その反對に、すっかり色が褪めて、ひよろ／＼のへな／＼子になつてゐるものもある。殊に生活訓練の上から、大部くづれたと思はれることが多いが、さう氣になくてもいい。一旦懸けたこと、さう／＼素に歸するものでもない。生活環境が變つて、おのづと生活ぶりも變つただけの話で、幼稚園に來れば又もとの幼稚園の子になる。あせらずに。殊に、いけない／＼と極めつけないで、前保育期の折角の装を、もとつこなしにするような仕方をしてないで、だん／＼に信用して、もとに歸せばいい。きつと歸せもする。

それよりも、僅か一ヶ月といつても、此の年齢の子どもには可なりの發達時期であることを忘れないで、その變化を積極的に理解してゆくことが肝要である。幼稚園ばかりが教育の場所ではなく、家庭だつて、休み中だつて、立派に發達してゐる。そこを無

駄にさせないことこそ、第二保育期の生活訓練の——否、保育全體の要訣であらう。

おだてるのはよくない。しかし、引下げは尙よくない。どつちかといへば、あらゆる機會を引上げに利用すべきである。夏中ぞうした。それはよかつたねえ。山へ、よかつたのね。海へよかつたのね。家にゐたの、よかつたのね。その間の一つ／＼の經驗をもとに積み上げて、自分は第一保育期の幼児と同一にあらずと思はせることが必要である。

必要といふよりも、子どもらはさうなつてゐる。お休み／＼と、まるで、生活も發達も停止してゐたかのやうに扱ふのは最もよくない。自信をもたせること、自尊心をもたせることは、生活訓練の最大の任務である。保育期の新たに今月。實にその絶好の好機會である。

年少の組の子、此の四月始めて入園した子にとつて、此の休み中が與へた心の作用は殊に大きいものである。四月入園、幼稚園のお客様のやうな、新來者のやうな、どこまでも幼稚園が主で、自分がそこへはいつてゐるとだけ感じられる風が脱げない。いろいろのことで幼稚園の生活に慣れはしても、やつぱりわがものにし切れないであつた。

それが暫く幼稚園を離れてゐて、離れて幼稚園を眺めた。思つた。味つた。そこで、幼稚園がすっかり自分のものになつた。そ

の自分のものとして、大手を振つて登園も来るのが、第二保育期の心理である。

そこで、我ままにもならう。いたづらにもならう。おづ／＼してゐた子が平氣にもならう。平氣が過ぎて、鬨々しく見えることもあらう。それは時とすると驚くばかりである、之れは單に精神の一ヶ月の發達の結果だけからではない。幼稚園と自分との關係がらの社會心理がある。先生は、呆れてゐるだけでなく、その意義をよく／＼解しなければならぬ。

そこで、簡單にいへば、かくてこそ始めて眞の幼稚園生活が始まるのである。眞の幼稚園生活が始まつてこそ、眞の幼稚園教育が始まり得るのである。第二保育期、特に新入園児に對する意義は深い。

一體、幼稚園にしても學校にしても、そこで教育をされる場所といふ風にのみ考へられてゐることが多いが、實は、子どもに、その生活を與へることが第一義なのである。家庭だけを我ものと思つてゐた子に、幼稚園を我ものと思はせ、それから學校を我ものと思はせ、それから社會を我ものと思はせ、それから園を我ものと思はせる。斯うしたことに深い意味があるのである。園を我ものと思ふとは、分に越えた心もちのようだが、この心もちあつて眞に園を愛する。つとめでなく、義務でなく、我が心抑へ難き愛である。幼稚園も幼児にとつてさうでありたい。

それにしても、いゝ十月ですね。秋熟す實りの季節に、幼児等

は元氣がはち切れる。はち切れる程の強さの中におのゝみ、眞の躰も訓練も出来る。曰く生活訓練、曰く躰、所謂おとなしくさせること許りではない。元氣にすることであり、活潑にさせることであり、勇敢にさせることである。抑えるばかりでなく彈力をつけ、控へさせるばかりでなく伸長させるのでなければならぬ。秋が子どもを充實させ伸展させる。人間の教育も、負けないで勢よくやらなければならぬ。積極の訓練、積極の躰。戦時下日本の天は高く晴れてゐる。

自由遊戯

上遠 文子

涼しい風が私達の氣持を引しめてくれます。あふれ出るお子さんの勢力を、私達のよき指導により、よりよき發達に導きませう。私共に平凡な、つまらぬ遊戯も、そのお子さんには又何かの好果をうるかもしれませぬ。一つ／＼誠意を持つて過しませう。

砂山くづし 否活潑的な遊びと申しませうか、御部室の前でぽつんとお友達なくたつてゐるお子さん達を砂場に誘つて、こんな事でもはじめたら動き出すのではないでせうか。お子さん達は銀砂と言つてゐますが、乾いた砂で棒を中心にさして山を作ります。さら／＼した銀砂の感觸は氣持のよいものです。

ジャンケンをして勝つたものよりその棒を倒さぬ様に砂を澤山とれるだけとります。次第に取つてゆくうちには棒のまはりの砂